

# 自分が「自分らしく」あるために 「性同一性障害」と学校・社会の課題

## 「性同一性障害」

「性同一性障害」が知られるようになったひとつのきっかけは、テレビドラマの「3年B組金八先生」が上戸彩さん演じる「性同一性障害」の中学生を取り上げたことでした。

自分の「体の性」と「心の性認識」に違いを感じ、そのことに苦しむ人々がこの社会にはいたのです。

でも私たちは、そのことに気がつかずにきました。それどころか、多分に侮蔑的なニュアンスを込めて、「オカマ」「ホモ」などと呼んできました。でも、それは侮蔑されるようなことだったのでしょか。

1999年に京都大学が行った調査によれば、「同性愛（ゲイ）」や「両性愛（バイセクシャル）」の男性のうち、そのことを隠そうとすることからくるストレスで精神的健康を害し、自殺を考えたことがある人は64%にもものぼりました。

「金八先生」に描かれた生徒は自分が「女性」であることへの違和感に悩み、乳房を刃物で切り落とそうとまでします。これは、この話のモデルとなった作家の虎井まさ衛さん自身の実体験に基づいています。

「体の性」と「心の性認識」の違いに悩み苦しんでも、それは日本の社会では“異端”のことでした。

その人たちが差別され、傷つき、「自分」を肯定できずに苦しんでいることに、「オカマ」と侮蔑する私たちはどこまで気づいていたでしょう。

中には風俗業につく人々もいます。しかし、それは多くの職場が異性装を認めなかったり、差別があるために、そのような職業に就くしかなかったためです。

「趣味」の問題ではないのです。

## 「性別」はグラデーション

ベストセラーになった「世界がもし100人の村だったら」には、こんな記述があります。

90人が異性愛者で、10人が同性愛者です。

この通りなら、同性愛は世界ではごくありふれたこ

とになります。

私たちはいままで、「男」と「女」は無条件に別のものだと考えてきました。しかし、生物学的に言っても、男女の区別は必ずしも明確なものではありません。

「体の性」と「心の性認識」は同じとは限りません。さらに「愛の対象」も違います。異性を愛する人もいれば、同性を愛する人もいます。

性別とはグラデーションであって、その境界にいる人々はけっして少なくはありません。これらの人々は「セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）」と呼ばれます。「性同一性障害」もそのひとつです。

日本にも「性同一性障害」者は1万人以上いる、ともいわれています。ただ、日本の社会がそのような人々にけっして寛容ではなかったために、実は私たちのすぐ隣にいる人々に気付かずしていただけなのです。

## 「性同一性障害特例法」の成立

欧米諸国では、同性婚や性別変更を法的に認めている国も少なくありません。昨年6月、同性愛を公表していたアイスランドの女性首相シングルザルドツティルさんは、パートナーの女性と正式に結婚しました。同性の配偶者を持つ初の国家首脳が生まれたのです。

これにくらべ、日本は社会的認識も法的な整備も、はるかに遅れていました。

日本の社会に大きな転機が訪れたのは、2004年の「性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律（性同一性障害特例法）」の成立でした。この法律では「性同一性障害」について、こう定義しています。

生物学的には性別が明らかであるにもかかわらず、心理的にはそれとは別の性別であるとの持続的な確信を持ち、かつ、自己を身体的及び社会的に他の性別に適合させようとする意思を有する者

特例法の成立で、「性同一性障害」はようやく日本でも法的に認められます。これによって、戸籍上の性別変更も可能になりました。2010年末までに性別

変更が認められた方は、実に2238名にのぼります。

ただ、「性同一性障害」は本当に「障害」なのでしょうか？

これを「障害」として認定した理由のひとつは、これまで性適合手術が認められていなかった日本でも、手術を「障害」に対する「治療」として行えるようにする必要があったからです。これを受けて、埼玉医科大学で1998年から「性適合手術」が始まります。

でも、「セクシュアル・マイノリティ」はあくまで多様な性のあり方のひとつです。「あたりまえ」のことであって、「障害」ではありません。「障害」があるとするれば、それは社会の方にあるのです。

## 学校と「性同一性障害」

「性同一性障害」に悩む人たちは、いつごろから性の違和感を感じ始めるのでしょうか。

当事者の多くは、この違和感を感じ始めるのは早ければ幼児期のころからだといえます。

「男の子」「女の子」の遊びへの違和感や服装への違和感は幼児の頃から生じます。そして、第二性徴を迎える頃から、その違和感は深刻なものになります。

「金八先生」で描かれていたのは、中学生でした。つまり「性同一性障害」は、小・中学校でも真摯に向かい合わなければならない課題だったのです。

昨年4月23日、文部科学省は「性同一性障害」の児童・生徒について「教育相談を徹底し本人の心情に十分配慮した対応をするよう」通知を出しました。

これは現実に、鹿児島や埼玉などでカミングアウトした児童・生徒があらわれ、学校や教育委員会が対応を求められたことを背景にしたものでした。

しかし、現実に「性同一性障害」の子どもからのカミングアウトがあったとしても、多くの教職員はとまどい、何をしてもいいのか迷うのではないのでしょうか。

昨年、奈良県の教職員が地元のセクシュアル・マイノリティ団体との共著で「教職員のためのセクシュアルマイノリティサポートブック」を発行しました。



「性同一性障害」の子どもたちへの支援のパンフレットとしては、おそらく唯一のものです。教職員向けに書かれたものですが、企業などの職場での「性同一性障害」への理解にも役立つでしょう。（この冊子は、<http://www1.ocn.ne.jp/~jtu-nara/>からダウンロードできます）

この冊子は「子どもたちの中にもセクシュアル・マイノリティの当事者がいるということを先生方に認識してほしい」とした上で、当事者の子どもたちの抱え

ている困難について、こんなふうに説明します。

- ① 自分を受け入れられない。  
自分がセクシュアル・マイノリティであることに気づいても、それを受け入れられない。
- ② 自分を出せない  
本当の自分を隠し、非難されないような「ふつう」の人として振る舞ってしまう。
- ③ 自分の将来をイメージできない  
働き、いずれ家族を持って、子どもを育てるのが「ふつう」と思い、自分の将来に漠然と不安を抱く。
- ④ 日常生活自体が難しい  
トイレに入れない、着たくない性別の服を着せられるなど。

そして、配慮してほしい「学校生活の中での支援」として、こんなことをあげています。

どのクラスにもセクシュアル・マイノリティの子どもがいるという前提で接し、授業する。セクシュアル・マイノリティが特別なのではなく、性のありようは一人ひとり違う、ということ認識する。

性に対する自覚は変わったり揺らいだりすることもある。早急に決めつけたり解決に走ったりするのではなく、本人の気持ちに寄り添い、時間をかける。

どうしてほしいかは人によって違う。よかれと思うことをおしつけるのではなく、その子がどう考え、何を望んでいるのか、じっくり本人と話し合う。

どのような子であっても、その子らしく過ごせるよう、教育を受ける権利を保障する。

どのクラスや職場にもセクシュアル・マイノリティがいて不思議ではありません。でも、「オカマ」をネタにして笑いを取るような教師や大人に、その子（その人）たちはけっして自分の悩みや「本当の自分」を打ち明けようとはしないでしょう。

いま何より必要なのは、私たちが意識を変えて「性のありようは一人ひとり違う」ということについて、共に考えることです。

そのような学校や社会をつくることは、「マイノリティ」のためだけではありません。

誰もが「自分が自分らしく」生きられる学校や社会をつくることに、つながるのではないのでしょうか。